会　報

ＴＵＷＶＯＢ会　　Ｎｏ．３８　　２００７．１２．２４

会費振込先　　みずほ銀行川崎支店東北大学ﾜﾝﾀﾞｰﾌｫｰｹﾞﾙＯＢ会　普通口座(370-1881604)

ホームページ　http://go.to/tuwv　または

http://www.geocities.jp/tohoku_univ_wv_ob/

メールアドレスをお持ちの方は利根川さんに連絡して下さい：GWT00287@biglobe.ne.jp

高山病とバイアグラ

３期（昭和３９年卒）佐藤　敦

今年もヒマラヤトレッキキングへ。これで６年連続となる。毎年、ワンゲルOB・超高年の６人から４人のパーティとなる、今年は４人。トレッキング・エージェントはいつもアルパインツアー（株）にお願いしている、そのアルパインツアーが出している、小冊子「海外トレッキング対策ノート」に急性高山病に関する記事がある、以下にそのまま抜粋する。

「高地肺水腫･･･急性高山病が進行した最終段階。安静にしていても呼吸困難がおき、咳がひどくなり、虚脱感や運動能力の低下が著しい。胸部に圧迫感や充満感がある。その対処法･･･ただちに下山させる。それが出来ない場合は十分量の酸素を吸入させ、ガモ・バック（持ち運び可能な加圧装置・プレッシャーバック）に入れる。医師の管理下では、ニフェジピンや**バイアグラ**の投与が行われる」

３年前、カラパタール（５５４５ｍ）を目指したが、私は５２００ｍでこの高地肺水腫になり、登頂を断念してペリチェまで下り、日本が創設した高山病研究施設に１日入院し、そこでヘリを呼びカトマンズまで戻ったにがい経験がある。

ヘリ代、入院・治療費など総額５０万円かかったが、事前に入っていた山岳保険で全て賄えた。（このトレッキング・エージェントを使う場合、山岳保険に入るのが必須となっている）ペリチェではイタリア人の美人女医に看病を受けた、その時いろんな薬を呑まされたが、この記事にあるようにニフェジピンやバイアグラだったかもしれない、しかし体力が消耗しており、残念ながらバイアグラの薬効は体験出来なかった。

その後も懲りずに、３回ヒマラヤに行ったが、高地肺水腫にはならなかった、高度が低いせいかもしれない、今年も５０００ｍを越える所には行かないので、心配はないが、万一の為にと医者にバイアグラを処方してもらい、４人分用意した。せっかくの用意だったがだれも重度な高山病にかからず、捨てるには勿体無いのでそのまま持ち帰った。

発売された時には話題になったバイアグラだが、市販されておらず医者の処方箋が必要だった・・今もそうかもしれないが、ヒマラヤの５０００ｍを越える所に行くといえば、処方箋を出してくれる事が分かった、しかし本当にヒマラヤの高地に行くと医者が信じてくれるかどうかは本人次第である。

ＴＵＷＶ　卒業３０周年ＯＢ山行　第９弾（ＴＵＷＶの庭、二口周辺の散策）

９期(昭和４５年卒）富川正夫

厳しかった訓練合宿、気ままなフリー山行、どっぷりつかつた二口山塊はTUWV時代の原点である。

［参加者］44年卒:前田夫婦、根岸夫婦、濱さん、水上さん、中里さん(8期7人)

45年卒:伊藤夫婦、片野夫婦、桃谷夫婦、富川夫婦、川田さん、原田さん、藤中さん(9期11人)

9月1日、秋保大滝にて集合し、二口温泉磐司山荘着。あいにくの小雨であったが翌日の足ならしをかねて、裏磐司(大行沢沿いの大東岳南側)の散策に向かう。沢ぞいの緑が心地よく、フジバカマ、ウメバチソウ、ゲンノショウコなどの草花を見ながらじつくり散策した。磐司山荘で温泉に入り、飲み会及び歌声会で盛り上がった。根岸さんが「山の愛唱歌集」とGIGAビートの伴奏つきを持参しみんなで熱昌した。二次会では、来年は泉か八が岳周辺とかの候補があがった。

9月2日朝藤中君が合流した。卒業以来で、そのヒゲならイスラムの世界でも通用すると思われ位変身していた。相変わらず小雨なので車で二口林道をまっしぐら。表磐司を展望出来る所で、停車。あんなに木は生えていなかつたとか、あの岩にのって写真をとったことなど、みんな思い出話でにぎわっていた。車止めがあり、林道を歩き始めたが、昔歩いた旧道は全く見つからなかった。小1時間程で二口小屋に到着した。

小屋の佇まいは昔も今も変わりなく、とても懐かしく思った。小屋でお茶を飲みながら、思い出話に花を咲かした。小屋の記録簿をみると2、3年前、小原さんや佐藤拓哉夫婦が利用しているのが分かった。懐かしい二口小屋の前で記念撮影を撮り、一部の人は二口峠に向かった。曲がりくねった林道を50分程で二口峠に到着、峠自体は昔の面影を残していた。花を見ながら、また、おしゃべりしながら下っていると、先行した川田君らが鉄製の車止めまで迎えに来ていた。あっという間に磐司山荘に到着し、来年の再会を楽しみに散会となった。

二口小屋の前で

奥秩父・笛吹川東沢釜ノ沢

21期（昭和57年卒）千田敏之

●リーダー下痢で奥利根から奥秩父に変更

昨年（2006年）の夏は果敢に知床・サシルイ川を攻めた21期・22期有志パーティーは、昨年末からミーティングを重ね、手塚（22期）をリーダーに、今夏は利根川水系・水長沢を遡行する計画だった。5月にはプレとして奥多摩・川苔谷逆川（手塚、千田、石井、石川）、6月には奥多摩・大丹波川真名井沢（手塚、千田、石井、土屋）をこなし、川苔谷ではザイルワークの練習も行った。奥利根のボート会社・奥利根マリンの予約も済ませ、あとは列車に乗るだけのはずであったが……。

ジャカルタに出張していた手塚から「明日帰国するが下痢が始まった」というメールが入ったのは入山2日前の8月1日、翌日になると「帰国したが水様便止まらず山は無理」と泣きが入り、パッキングも終了し、休暇モードで出勤していた在日組は途方に暮れた。昨年、手塚はサシルイ川遡行後、大腿部が何かにかぶれて腫れ上がり、下山後、網走の皮膚科を受診するというおまけがついた。今年も入山前からやってくれた。（12月第1週からまたまたインドネシア〈バリ〉である。今度こそは下痢などせずに生還したい。その暁には、水長沢雪辱戦、再チャレンジを提案したい。まだまだ行けるだろう。手塚談）

奥利根に詳しい手塚なしで水長沢は困難と判断した。しかし、休みを取ったのに山に行かないのもしゃくだと考え、3人で幾度もメールのやりとりをした結果、計画を変更することにした。結局、5年前にも遡行して勝手知ったる（はずの）奥秩父の笛吹川東沢釜ノ沢に決定。メンバーは私（千田、21期）、石井（21期）、石川（22期）である。

●石井、蝉になる――それなりに危ない釜ノ沢

8月3日（金）曇り

大遠征でもないので昼前に自宅を出る。JR特急で12：54塩山着。昼飯を駅前で食べてからタクシーで西沢渓谷バス停まで入る。途中、夜が麻婆豆腐ということで豆腐を買って行く。14時ころから歩き出す。途中からハイキングコースを外れ、東沢の登山道へ。道は結構荒れており、一般登山者は入山

禁止となっている。アップダウンが激しい沢沿いの道を約2時間で山の神。左岸にテンバがあり幕営。久々に焚き火を楽しむ。高野豆腐ではない本物の豆腐の麻婆は美味しい。

8月4日（土）曇り時々晴れ

7時50分より遡行開始。快調に遡行を続け10:20釜の沢出合い。ここから核心部に入り、魚止ノ滝、千畳のナメ、スラブ滝などを巻き中心で超えて行く。5年前は雨中の遡行で水量も多かったが、今回は水は適量でさほど困難もない。11:30、西俣、東俣が合わさる両門の滝到着。ちょうど日も差してきて夏の沢登りの素晴らしさを実感する。

両門の滝

両門の滝から東俣に入る。ここは東俣の滝の右側を踏み後に従って登って行く。7割方登ったところで傾斜が急になり、トレースが曖昧になる。確か5年前は藪の中をもっと大きく巻いたはずだと思いながら、滝の脇の急傾斜のスラブを登って行くと行き詰まった。落ち口まであと3～4メートル。しかし、ちょっといやらしい。

千畳のナメ

私は巻き道を探しに少し折り返した。なんとその間に石川は「えいやっ」と確保もなしで登り切ってしまった。子持ちサラリーマンがやることではない。石井も知らぬ間に石川の後を付いて行ったが、登り切る前に行き詰まる。身動き取れず10分ほど蝉になる。結局、私は左岸側の壁を木の枝をつかみながら大高巻き、石井も同様、右側の急傾斜の藪に逃げる。（今でも蝉になった時を思い出すとぞっとする。下山後、いくつかの山行記録を見ると、みんな平気で石川ルート登っているようだ。石井談）。

この時、ザイルは私が持っていた。石川が持っていれば確保もできたろうに。段取りの悪さといったらない。約1時間かけて両門の滝を越えたが、沢登りの技術、センスの衰えを痛感。5年前は何なく越えていたのに。ショックを受ける。

実は釜ノ沢の辛さはここからだ。長い、長い広河原のゴーロ歩きが始まる。両門の滝を巻き終わって歩き出したのが12:30で、ゴーロ終了点の水師沢出合いは14:30であった。ここからは小滝群が続き、傾斜もきつくなる。豪快で高度感もある3段30メートルのスラブ滝は、右手の木賊沢側の部分を登る。ここも落ちたらやばい。直登後、左手にトラバースし沢に戻り、再び急登。甲武信小屋到着は15:30～16:00であった。

疲れ果てていたので、テントはやめて小屋止まりに変更。酒を飲み交わす元気もなく、夕食後、全員爆睡してしまった。5年前は1日で西沢渓谷から甲武信小屋まで登ったが、今の我々ではそんな計画は到底無理である。

●体力・技術・センスの限界

8月5日（日）晴れ

翌日は甲武信岳をピストンし、西沢渓谷に下山した。近場で急遽決めた計画にしては、それなりに充実した山行ではあった。ただ、年齢と共に体力・技術・センスの限界も見え始めた。果たして手塚が完調であったとして、水長沢は行けたのだろうか？もうあまり無理するのをやめて、これからは楽しい山行を続けていこうと、下山後3人で確認しあった次第である。

2008年はプレは二口・樋の沢、夏は黒部源流でゆったりと岩魚釣りはいかがでしょう。

オランダ、ベルギー旅行（2007年11月）

３期（昭和３９年卒）後藤龍男

毎年秋にヒマラヤトレッキングを楽しんでいましたが、帰国後必ず悪性の風邪に罹り、寝込むことが続いたので、今年は不参加にし、代わりに家人とオランダ・ベルギーを旅行してきました。バスで各地を見て回る典型的なツアー旅行です。

チューリップの季節のアムステルダムは日本人だらけで、まるで“ハウステンボス状態”だそうですが、日本の冬と同じ気温の晩秋はどんよりと冷たく、日本の旅行者は見かけませんでした。

安ツアーなので、アムステルダムのホテルはスキポール空港の反対側、市中心部から４０キロも離れた場所でした。ダム広場などダウンタウンを散策した後、タクシーでは高くつくので、東京駅とそっくりな中央駅（これを真似て東京駅が作られた）から電車で空港まで帰ることにしました。駅で切符を買おうとすると、空港駅が工事中で、ひとつ手前の駅までしか行かない、そこから臨時のシャトルバスが出ていると言われました。駅に着いてみると大きなバッグを抱えた航空旅客でごった返しています。たまにしか来ないバスに乗客が苛立って、騒然とした雰囲気です。バスが着くと、我勝ちにドアに殺到し押し合いへし合い、列も順序もへったくれもありません。大人しくしているといつまでたっても乗れないので、けんか腰で家人をドアに押し込んでやっと空港にたどり着きました。

いざとなるとヨーロッパ人も悪名高い中国人と変わりないと言うことがよく分かりました。 それにしても、ヨーロッパ有数のハブ空港で、工事のためとは言えアクセスを丸二日もストップするなんて、日本ではまず考えられません。ヨーロッパは余裕があるのか呑気なのか。

キンデルダイクの風車

その後、デルフト、風車のキンデルダイク、アントワープを廻り、ベルギーに入ってアルデンヌ地方のシャトーに泊まり、ブルージュからブリュッセルに至りました。見て回るものは、どこの街にも必ずあるマルクト広場と市庁舎と大聖堂のオンパレードです。そのうちどれがどれやら区別がつかなくなりました。至る所で見受けるレンブラントやルーベンスの絵にしても、絵心のある人には堪らないのでしょうが、無粋な当方は暗い陰鬱な宗教画ばかり見せられているうちに、これ一枚あったら一生遊んで暮らせるな、などと下劣な想像しか湧かなくなります。

それやこれやあっても、落ち葉散る晩秋のヨーロッパはしっとり落ち着いた雰囲気で、美味しいベルギー料理（オランダは実に不味い。距離は近いのになぜあれほど違うのか？）とともに堪能出来ました。旅程のほとんどをバスで廻ったのですが、設備の整った片側３車線の高速道路が四通八達していて、それがすべて無料というのは羨ましい限りでした。日本はなぜそう出来ないのでしょう。

写真はキンデルダイクの風車とアントワープ大聖堂のルーベンス「キリストの昇架」です。風車は近くに寄ると巨大で、あまり風情はありません。「キリストの昇架」は、「アントワープの犬」でネロとパトラッシが死ぬ直前に見た絵です。イギリス人が書いたこの話は日本では有名ですが、現地の人は誰も知らないそうです。

キリストの昇架

彷徨える湖への途

４期（昭和４０年卒）小原佑一

現役時代、スウェーデンの中央アジア探検家、スヴェン．ヘディンの“さまよえる湖”を読んで憧れたロプノール、その後、そのロプノール付近で中国の最初の原爆実験が実施されたと報道されがっくりしたものの忘れられずに気になっていた地域です。

今秋、ヨメさんサービスでシルクロードのパッケージツアーに参加しました。詳しい地図との照合が出来ず苦労しましたが、グーグルの衛星写真の地形から判別してしっかり予習しました。

井上靖の小説で有名な中国甘粛省敦煌の町を出て西へ。トラックの行きかう国道215号線を離れてからは、人っ子一人住んでいない荒地の中の一本道を北西に約100kmを行ったところに、昔シルクロードを通って中国に出入りする宝玉を監視していたという関所、玉門関の遺跡があります。鉄柵で囲まれた大きな箱のような四角い遺跡が潅木（タマリスク）の生えた荒地のかなたに望まれ、近くには観光客のためのレストラン、トイレ、宿泊施設が一棟、少し離れた高台には人民解放軍の立派な建物やアンテナが建っていました。そこからさらに西へ80kmほど人民解放軍の基地に沿って進むと敦煌「魔鬼城」 雅丹国家地質公園に着きます。ここは2001年中国政府によって観光地として指定、一般に公開されました。

ヘディンの文にヤルダンという言葉やスケッチがよく出てくるのですがなかなかイメージをつかめませんでした。漢字で書くと“雅丹”でウイグル語の壁のようになった風蝕された小高い土の丘のこと。夜にこのヤルダンの間を吹きぬける風が魔王や鬼のうなり声のように聞こえることから“魔鬼城”とも呼ばれるそうです。

1934年暮れ、ヘディンら一行はこのあたりで桜蘭を通過する昔のシルクロードを参考にロプノールへの通行可能なルートを探っていた。“・・・塩分を含んだ泥土が乾燥して煉瓦のように堅くなり、ほぼ半メートルくらいの高さの脊梁を形づくっている。これはあらゆる輸送手段を、徒歩旅行者さえも手ひどく痛めつけるものであって、･･･” “･･･地面は南西と西に行くほどやわらかくなります。自動車は結局どうしようもなくて、石膏を含んでいてしまりのない微細な砂塵にもぐってしまったので、引き返すよりほかなかったのです。････”

さて、今、この地質公園の資料館／事務所からアスファルト舗装の一本道がまっすぐ西に延びています。この道を行けばロプノールに到達できる！ ガイドの説明では四駆を連ねてツアーを組んで行った人たちもいるようです。しかし、現在は楼蘭などの遺跡保護のためロプノール地域への立ち入りは非常に厳しく制限されているようです。新彊ウイグル自治区の詳細な地図とグーグルの衛星写真を見ながらヘディンの本を読み直しています。「彷徨える湖への途」極細フェルトペン／水彩

アンナプルナ内院 紀行

５期（昭和４１年卒） 八木 眞介

１０月３０日から行きたい場所の一つであったアンナプルナ内院へのトレッキングに行ってきました。３度目のヒマラヤ行きです。

ヒマラヤは例年なら時期的に快晴続きという天候になるはずでしたが、今年は天候不順で、内院へ着くまではずっと曇り、内院の入口であるマチャプチャレベースキャンプでは雨、アンナプルナベースキャンプに滞在した１日はなんとか晴れたものの雲が比較的多く、帰路も前半は雨、最後にやっと晴れたという状態でした。このコースは、マチャプチャレベースキャンプまでは展望のない狭い谷の中を、かなりの急な上り下りを繰り返すというあまりありがたくないトレッキングを強いられるコー

スなので、谷の先に見えるはずの白い峰も見えないという谷歩きは、ちょっとつらかったというのが、正直な実感です。

内院への道は、下の方は急斜面の田畑の中を歩く道です。その途中で見られる棚田や段々畑は驚きの一言に尽きる規模の大きさで、最も規模の大きいところでは、深い谷底から山の上までおそらく８００m以上の高度差があります。人間の営みのすごさを感じました。これらの田畑では高度の低い所では米、高い所では稗や蕎麦（赤い花の蕎麦）を栽培しているようです。上の方は、内院トレッキング専用の道になり、深い森の中をひたすら歩き、森林限界を過ぎるとやっと明るい谷になるという道でした。コースの中ほどまでは、道のまわりの木々に野生の蘭が着生しており、花には季節はずれだったため、数株しか見つかりませんでしたが、野生蘭の咲いている姿を見られたのは、蘭の好きな私には、ありがたい経験でした。

アンナプルナＩ峰

マチャプチャレ

内院は、期待どおりすばらしい所でした。アンナプルナベースキャンプ滞在の日は、晴れていましたが、ガスが多く、周辺の山のどこかはガスに隠れているという状態で、全体が同時に見えるということがなく、３６０度白い峰々に囲まれた円形劇場の中にいるという気分を味わうのには、ちょっと不満の残る天候でしたが、その中に身を置いている気分は最高で、すばらしさを十分満喫できました。特に、アンナプルナＩ峰、アンナプルナサウスの黄金色の朝焼け、マチャプチャレの真っ赤な夕焼けは感動ものでした。

帰路は、天候が回復して来るにつれて、気持ちの良い遊歩気分を味わえ、やっと歩く事を楽しめたというところです。最終日のオーストリアキャンプからのアンナプルナ山群やマナスル山群の朝の展望は、トレッキングの締めくくりの最後の感動を与えてくれ、気分良くトレッキングを終えました。

木曾駒ケ岳登山

６期（昭和42年卒）加藤邦明

2006年は木曽駒ケ岳へのつもりが開き直って三ノ沢岳に行った。2007年は再挑戦をして木曾駒ケ岳へ登った。

１． 木曾駒ケ岳

2007年9月5日(水)、菅の台からバスでしらび平に到着し、ロープウェイに乗り換えた。標高2,612mの千畳敷で登山カードに記入し、準備体操の後に登山開始とした(8時45分)。駒ケ岳神社に登山の無事をお祈りして、高山植物を写真撮影しながら、尾根まで登った(9時26分)。

夏の盛りも過ぎたのか、宝剣山荘と天狗荘はドアが閉まっているようであった。尾根道には、“コマクサ増殖工事”なる看板があった。中岳を通過して標高2，956.3mの駒ケ岳山頂に到着した(10時13分)。山頂には一等三角点があった。北東の駒飼池のあるカールからガスが湧き上がってきた。下るほどに、70歳から80歳の方々と思しき10数名の団体にすれ違った。皆さん元気のお印

のような方々であった。ロープウェイ駅に戻った(12時05分)。菅の台四季前でバスを下車し、道路向かいの「こまくさの湯」で一息ついた

２．<u>三ノ沢岳</u>

2006年9月27日(水)は千畳敷を8時40分に出発した。黒雲母花崗岩を踏みしめながら、極楽平に到着した(9時10分)。宝剣岳(2, 931m)－中岳－木曾駒ケ岳へと続く山稜の出発点であった。目前を見れば、宝剣岳へはガレ場を踏んで、鎖伝いの岩場で、足元スースーのルートとなっていた。高所恐怖症の身分としては、危険回避で、駒ケ岳に行くのは即諦めた。気持ちを入れ替えて、目指した三ノ岳三等三角点に到達した(標高2，846.5m：11時28分－12時00分)。登山道は右からの寒風が気持良かった。千畳敷へは14時00分に戻った。

ピラミッドの謎（土建屋的見方）

７期（昭和43年卒）真尾征雄

平成19年４月に、同期の菊谷と「エジプト・トルコ13日間の旅」に行ってきた。菊谷とは気心も分っているし、彼は英会話を趣味としているので心強い相棒である。

悠久の年を経て今も我々にロマンと謎解きをかき立てるピラミッド。エジプト考古学博物館の黄金のマスクやミイラや巨大な石造。様々な時代の遺跡が随所の残っているトルコ。何万年もかけて自然が創り上げたパムッカレやカッパドキアの不思議な地形。早朝から街に鳴り響くアザーンの旋律。エジプト・トルコは毎日が感動の連続で、期待以上の旅であった。

ギザ街外のクフ王（右）とカフラー王のピラミッド

出発前に、ピラミッドに関する本やビデオを見て予備知識は持っていた。エジプト遺跡に関しては、日本では吉村作治氏（私の高校の山岳部の1年先輩）の著書が圧倒的に多い。彼は、「ピラミッドは王墓ではなく、宗教的な目的もあるが、ナイル川が氾濫する農閑期の農民救済の公共事業である」と説明している。石切り場には、それを裏付ける「国王万歳」とか「家に帰ったら、腹一杯パンを食おう」との落書きがあるからだという。

クフ王のピラミッドで　石の高さは1.5m程度

「ナイル川を西側に蛇行させないようにする水制工である」とする意見の学者もいた。現在発見されているピラミッド99基の内、98基はナイル川の西側に造られており、毎年氾濫するナイル川を何とか治めようとした遺産ではないかと。土木屋の私としては､出発前この説に共感を覚えていた。

スフィンクス前にて　砂嵐でほとんど見えない

ギザのホテルを出て街外れに来たら、いきなり大きなピラミッドが二つ、目に飛び込んできた。有名なクフ王とカフラー王のピラミッドである。現地ガイドは、王墓説で説明していた。カフラー王のピラミッドの玄室まで、狭い通路を中腰になって入った。玄室の石積の精密さに唖然とした。はがき1枚の隙間も無い石積を、鉄器は無く軟らかい青銅器しかない時代に、どうやってこのような平滑な面に仕上げ、その石を寸部の狂いもなく積上げたのだろうか。農民が片手間にできる仕事ではなく、専門の技術を持った石工と鍛冶工によるものであると思う。

現地でピラミッドを見て「よくぞ4000年以上前に人力だけでこれだけの物を造った」と感動した。そして「これは間違いなく、王が威信をかけた国家の大事業であった」と確信した。高度な設計と測量と施工管理、石を図面通り平滑に切り出す技術、石の運搬技術（水上及び陸上）、石積みの技術等非常に高度な技術を駆使して、全国から集められた農民が数十年一日も休むことなく造り続けたものであると確信した。洪水による氾濫期にできる作業は、主として石切り場での切り出し作業と、それをいかだに乗せて建設地まで運ぶことであろう。そり状のものに乗せて斜路を押し上げて、石を所定の位置に積む作業は、水が引いた農繁期に行ったものと考えられる。

ピラミッドを現実に見て、「農閑期における農民救済の公共事業である」という意見は間違いであると確信した。しかし何の目的で造ったのかについては、益々謎が深まるばかりである。ピラミッドは確かに大きいが、ナイル川の水制工として考えるには、あまりにも小さな点でしか過ぎなかった。「ピラミッドの謎は永遠に解き明かされない」のが良いと最近は思っている。

エギュー・ド・ミディ南壁レビュファルート（クライミング@シャモニー）

８期（昭和44年卒）佐藤拓哉・良子

ビレイ点の左の岩を回り込むと、目を見張る美しさの、赤い大きなフェースがはるか上まで、下ははるか雪原まで広がっていた。しかし、美しさに感動している余裕はまったくなく、すぐ、この広いフェースの真ん中に走る、指先に引っかかる程度の細いクラックを、どうやって登るのか心配になった。ここは標高3800m、エギュー・ド・ミディ南壁レビュファルートの２ピッチ目である（写真）。

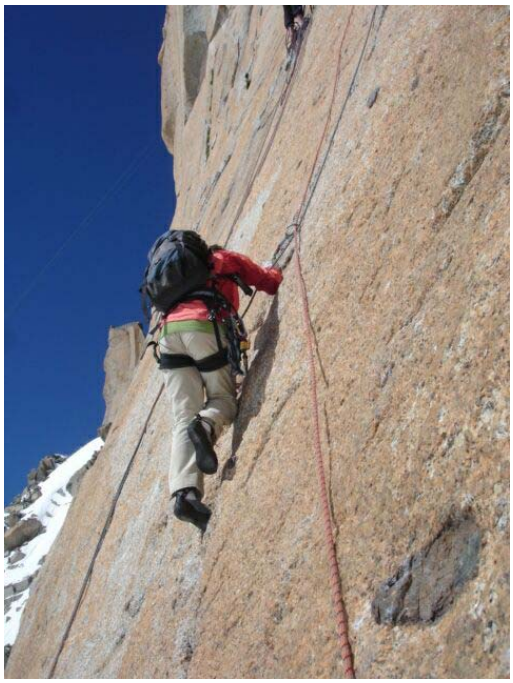
このルートは、伝説の名クライマー、ガストン･レビュファが19??年に初登した、シャモニーで最も有名なルート、最も美しいルートである。レビュファと言えば、人一人がやっと立てるような、針のように尖った岩塔の上に立っている写真があまりにも有名である。昔見たその写真は、今でも鮮明に記憶の中にある。それ以来、シャモニーの峰々、特にエギュー・ド・ミディは憧れの的であった。

去年の９月に定年を迎えたのを記念に、アルプスでクライミングをすることにし、８月22日、シャモニーを訪れた。天候に恵まれ、毎日、ホテルから朝陽に輝くモンブランを望むことができた。

23日、ホテルでシャモニーのガイドと落ち合い、ゴンドラを乗り継いで、ミディの対面の赤い針峰群の最高峰、プレバンの頂上まで登る。取付きの近くまでゴンドラで行くのがシャモニーのクライミングである。シャモニー最初のクライミングは、頂上直下の垂直の壁のフェースからクラックを登る５ピッチのルートである。背後のシャモニーの谷を挟んで、モンブランからミディの美しい景色を見ながらの気持ちのよいクライミングであった。

24日は、スイス国境まで足を伸ばし、下半分がスラブ、上半分が垂壁という大きな壁の真ん中に伸びるルートを登った。このルートは、アルパインというよりはフリークライミングに近く、技術的にはかなり難しかった。穂高の屏風岩にちょっと似た感じの壁であった。

25日と28日は赤い針峰群のアンデックスの岩を登った。アンデックス（Index）は「人差し指」という意味で、25日はその由来となった、指を突き立てたような岩塔を登った。遠くに見えるグランドジョラス北壁の景色が素晴らしかった。



レビュファルート２ピッチ目

26日は対岸にドリューのある大きな氷河を２時間歩き、

花崗岩のとてつもなく大きなスラブを登った。草木がほとんどない、世界一美しいスラブであった。

28日はいよいよレビュファルートである。ミディの頂上駅でアイゼンを着け、両側が切れ落ちた雪稜を下って取付きへ向かった。他の岩場とは異なり、なぜか南壁だけが赤い色をしている。フェースに伸びるクラックを巧みに繋ぎ、バンドを左上しながらのクライミングの間中、左側にはモンブランの白い頂が、右の後ろ側にはグランドジョラスに連なる峰々の素晴らしい景色が目に飛び込んでくる。８ピッチ目、最後のピッチは左上するフレークから急なフェースの難しいピッチである。ここをなんとかクリアすると、観光客で賑わうミディの展望台に飛び出し、感動の連続であったレビュファルートの登攀を終えた。

レビュファルート３ピッチ目終了点
バックはモンブラン

いかがお過ごしですか？

５期（昭和４１年卒）の吉田公です

この11月１日に『中江藤樹心学派全集』1100頁、18000円、研文出版を刊行しました。小山国三さんと共編です。

小山さんは60歳まで企業に勤務していましたが、その頃からが私自身の為に時間を使うのだと覚悟して、東洋大学の課目等履修生になり書道・書学を学んだ後に、小生が主任を務める大学院文学研究科中国哲学専攻にお入りになりました。いろいろとお話しをする中で、会津若松のお生まれであることが分かり、その折りに会津若松は江戸時代には中江藤樹の心学が最も盛んに学ばれた地域であることを説明し、その時に学んだ成果が自筆写本のままにあり、それを活字に起こすことに挑戦された先学がおられましたが、なお不充分であること、その自筆写本が東洋大学に所蔵されていることなどを、るる述べました。しばらく期間をおいて改めて話題にしたところ、小山さんが「やってみましょう」と決断されました。それから５年間、毎週木曜日、二人で歩み続けました。

解読と入力。難儀しました。そのさまの一端が小山さんは「あとがき」に述べておられます。江戸時代の思想史を解明する基礎作業が成就されました。画期的なことです。関係者に御披露しましたところ、異口同音に小山さんの労苦を賞讃する言葉を返して来ました。小山さんは、「私がこの世に生きたことの証言になる」と感慨無量です。もう一つの人生を生きる一つのモデルかと思います。

18000円は高いのですが、その内容は今日の我々にもそのまま「如何に生きるか」という問題を投げかけています。店頭でお見かけする機会がありましたら、「序文とあとがき」だけでもお読み下さい。内容も読んでみたいと思う方がおられましたら、小生にお知らせ下さい。２割引になります。

私どもの分野では、人手が足りないために、またお金儲けには縁がないために、大事なことがほったらかしにされています。時間にゆとりがあり、日本文化の遺産を世界に発信することに関心のある方は、お知らせ下さい。確実に将来世代に貢献する仕事が山ほどありますので、お手伝い頂ければ幸甚に存じます。皆さん一人一人の業績として、将来世代にプレゼントする仕事になります。そのつもりになればどなたでも実現できます。お待ちしています。

２０期（昭和５６年卒）の佐々木晃（ささき農園･7年目）です

春夏野菜の出来は上々でしたが、夏場以降は、週末のたびに子供会（今年会長職を押し付けられた）の行事が続いて仕事にならず、秋冬野菜はメロメロ。たびたび出荷を休んだので、今年の決算は大赤

字必至で、忙しくて儲からないワーキングプアそのものです。
　それでも今年も大勢のTUWV仲間が手伝いに来てくれたので助かりました。主力の1人だった冨士原（21期）が広島に転勤したのは痛かったけれど、その他のメンバーも経験を積んだので、だいぶ能率が上がっています。「年年歳歳花相似たり　歳歳年年人同じからず」と言いますが、野菜は毎年できばえが違うのに、TUWV仲間はちっとも変わらないのはなぜでしょう？ 12月8日には19期の小山さん（初参加）、20期の岩屋、21期の千田、22期の石川と手塚のメンバーで、落ち葉集め＆忘年会の予定です。収穫と草取りに忙しい夏と違って、土方仕事や大工仕事が主な冬場はワンゲル気分をたっぷり味わえますので、気が向いたらどうぞお気軽にお訪ね下さい。

２２期（昭和５８年卒）の利根川敏です

　ＴＵＷＶを卒業し２５年、ＯＢ会の電子メール管理人を務め１０年目になります。仙台勤務も６年目となり、公私共に充実した日々をおくっています。
　今年は大学創立１００周年、仙台市で開催された記念行事への参加、出身研究室の同窓会開催など、ＴＵＷＶの活動とともに、母校東北大学との関わりが大変多い年でした。最近では、大学院の授業で企業見学を取り入れる講座も多く、後輩の企業見学の際には、自社の研究開発活動を紹介しながら、東北大学の学生さんとも接しています。
　ＴＵＷＶとは、１月の新年会（新橋亭）、３月の新人ＯＢ歓迎会（国分町東洋軒）、年間を通じた電子メールアドレスの維持管理（今年は３０件程の連絡がありました）、年末のＯＢ会報原稿の投稿依頼と発行のアナウンスなど、１年を通じた対応もほぼ定常化しています。登山から縁遠くなったのが大変残念ですが、自宅から職場への自転車通勤（往復２０ｋｍ、約７０分の運動）のあい間に、蔵王、二口の山々、泉ケ岳などを眺めながら、毎週の様に山登りをした日々を思い出す事もあります。仕事の方も、エンジニアとして社会人になったつもりが、最近は登山と同様に実験実務から縁遠くなり、研究開発中計策定や予算編成といった戦略業務が多くなっています。相変わらず東京出張も多く、今年は1/4が東京出張となり、ほぼ毎週の様に仙台駅と東京方面を往復しています。
　結婚して２２年、子育ても手がかかる時期は過ぎ、今年は家族そろっての四国一周旅行、気仙沼方面へのキャンプ、夫婦２人での小旅行（福島県大内宿）など、時間的な余裕も持てる様になりました。大学卒業後２０年以上が過ぎましたが、仙台をベースに生活することで、仕事の忙しさの中にも、ＴＵＷＶの活動や出身大学に関連した様々なイベントに主体的に関わる事ができる点、大変うれしく思っています。
　在仙ＯＢの１人として、クラブ創立５０周年を意識しながら、泉ケ岳や二口など大人数の方々が集まれるサイトをそろそろ調べないといけないのかな．．．．とも考えています。
私自身がボケない限り、ＴＵＷＶの電子メール管理人はライフワークになりそうです。今度とも電子メールアドレスの管理を通じて、皆様のお役に立てればと思っています。ＯＢ/ＯＧの方々の最新アドレスが必要な方、電子メールの追加、修正が必要な方は、下記連絡先までご一報下さい。今後ともよろしくお願いいたします。
　〒983-0032　仙台市宮城野区仙石15-3　022-786-5156
　携帯　090-1432-7806　　電子メール　GWT00287@biglobe.ne.jp

４５期（平成１８年卒）多田忠義です

　東北大学大学院環境科学研究科の博士前期課程2年です。専門は人文地理学で、特に地域森林資源利用の実態を東アフリカの農村社会から検討しています。ワンゲル時代は沢を中心に活動していました。2004年夏、皆様の御協力のおかげで久しぶりに西表島縦断を成し遂げることができました。部のWebサーバーを管理・運営しています。
　OBになって、現役時代とは一味違った山を楽しむようになりました。今年からは、サンライフの渡邊さん（現在，独立してNOBU and associates代表）とその仲間で山に行くようになりました。
　今年の記録は：1月に栗駒山（BC）、2～3月はケニアでフィールド調査（山行けず）、4月は東栗駒山（BC）、月山2回（BC）、鳥海山・祓川の吹浦、5月は鳥海山の湯ノ台（BC）、月山の大雪城（BC）、6月は磐梯山（大学の実習）、大朝日岳（古寺～大朝日ピストン）、7月は和賀岳（秋田県側ルート）、秋田駒ヶ岳、御所山（船形山）、鳥海山（湯ノ台～新山～鳥海湖～月山森の周回）、8月はケニアに行く前に岩手山（柳沢コース）、9月は帰国後以東岳（ツアーお手伝い）、10月は和賀岳（岩手県側

ルート）、後烏帽子岳（ツアーお手伝い）、11月は二口山塊（白糸の滝～龍ピーク「糸岳」～小東岳～樋ノ沢～大東岳登山口、大東岳ピストン）と、現役に負けないぐらい入山しました（BCとはバックカントリーのこと）。入山日数は、今のところ‥‥25日！！！です。

最近は､月～金はとにかく大学で研究をしまくり､土日は山へ行く､という生活を心がけています。週末でリフレッシュできた頭からは、アイディアが湧き水のごとく出てきます。

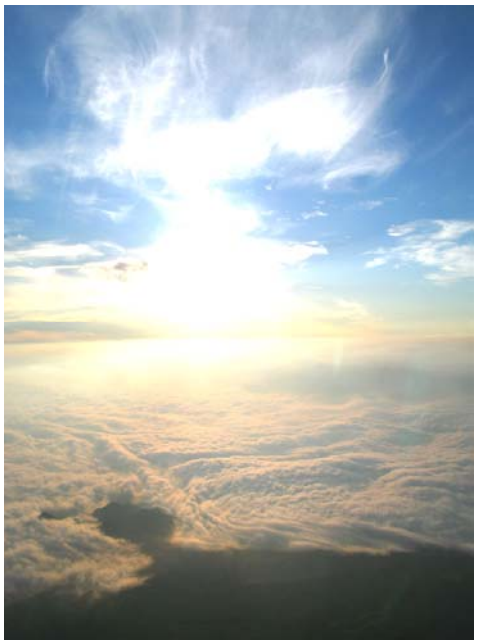
来年は進学して、後期課程になります。人文地理学の分野、すなわちフィールドワークが重視される分野において、3年の標準年限で卒業することは極めて大変だと言われていますが、できる限りONとOFFを上手に切り替え、人生を楽しんでいきたいと思っています。

さて、唐突にとりとめのないことを書きたいと思います。「忙しい」という言葉、皆さん一日に何度使っているでしょうか。‥‥自分もついついそう答えることが多いのですが、「忙しい」というのは、ともすると都合のよい「言い訳」のような気がしてならないのです。世の中、本当に忙しい人はたくさんいるでしょう。自分のやり方、計画の建て方、実行の仕方‥‥こういったことを顧みずにただ「忙しい」という自分が情けなく思っています。ONとOFFを上手に棲み分け、どちらの状況でも効率よい活動をできる人が機知に富み、かつ人生を本当に楽しめるのだと思います。

最近､現役のワンゲルは｢忙しい｣という盾を振りかざしてはいないか？ と思うことがあります。無論、私もたくさん振りかざしてきましたから、批判する資格など当然ありません。ただ、自分たちが、本当に「ワンゲル活動」に愛着を持っているのであれば、「忙しい」という言葉を使い過ぎるのは良くないことだと思うようになったこの頃です。‥‥因みに私の場合、最近は忙しいという言葉を使って断ることはやめ､自分のやり方を順応させることによって､難局を乗り切るようにしています。

今シーズンは早く雪が降っているので、雪なしには生きて行かれない人種（僕のような人）は居ても立ってもいられないことと思います。今冬はテレマーク歴2年目となった僕もBCコースへ本格的に行けそうです。乞うご期待です！最後に、今年度の活動写真を2枚ほど載せておきたいと思います：

2007/7/22　鳥海湖から鳥海山（新山）を望む



2007/8/12　岩手山より朝日と雲海
「言葉を失う美しさ」を体験

平成１９年年４月、６期（昭和42年卒）加藤忠夫さんがご逝去されました。
ここに慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

新 年 会 の お 知 ら せ

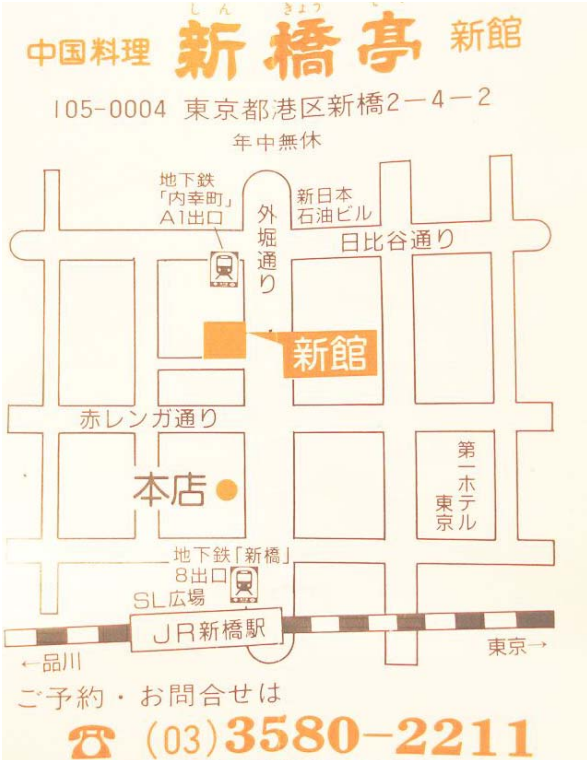
新年会は**毎年1月の最終金曜日**にいつもの所で行っています。(本店から新館に変わりました)

2008年1月25日(金)18:30 (会費は10,000円の予定)

新橋駅のすぐ近くにある**新橋亭(しんきょうてい)**新館(TEL　03-3580-2211　変わりました)

お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。遠くの方でも東京に出張などで来るような場合には、ぜひ出席して下さい。飛び込み大歓迎です。逆に、出席ということになっているのに欠席される方も結構います。これは本当に幹事泣かせ。*予定が変わった時は早めにご連絡*下さい。

連絡先　佐藤拓哉　℡ 046-841-8622　メール:　taku0412.and.ogya1103@jcom.home.ne.jp



＜2007年新年会出席者＞

（Ｓ３９）大津満、小俣勝男、岡好宗、後藤龍男、佐藤敦、松木功　（Ｓ４０）及川捷悦、小原佑一、島崎質、関川利男

（Ｓ４１）相沢宏保、太田光二、桜洋一郎、佐藤豊治、渋川尚武、藤田凱巳、吉田公平

（Ｓ４２）加藤邦明、青木祐二

（Ｓ４３）石川誠之、大釜寛修、金子清敏、菊谷清、藤森英和、村山貞一、上田俊郎

（Ｓ４４）小笠原弘三、佐藤拓哉、鳥山研一、三原健治　（Ｓ４５）富川正夫、桃谷尚安

（Ｓ４６）菅原英行、高野秀夫、田中康則、若佐則雄　（Ｓ４７）園部式正

（Ｓ４８）蔭山正宏、藤田真利子、神山文範、松井一昭　（Ｓ４９）岡部安水

（Ｓ５５）板橋正之　（Ｓ５８）利根川敏

（Ｓ６２）伊田浩之　　以上４５名

TUWVOB会　2006年会計報告

（東京口座）

1. 収　入

前回から繰越	362, 272
OB会費(15人)	40, 000
利息	31
計	402, 303

2. 支　出

会報　印刷	17, 548
送料	11, 110
封筒、ラベル	630
弔電(鈴木先生、青野さん)	12, 424
香典(鈴木先生、青野さん)	20, 000
生花(鈴木先生、青野さん)	40, 000
事務用品、通信	1, 288
次回繰越	299, 303
計	402, 303

★★　事　務　局　よ り　★★

✧　OB会員に不幸があった場合、OB会として次のように対応しています。

①　本人または配偶者に不幸があった場合はOB会として対応する。

②　葬儀に間に合う場合は同期の誰かがOB会名で生花を出す。費用は後日事務局に請求する。

③　葬儀に間に合わなくて後日同期の方が線香をあげに行く場合は、OB会名の香典(本人の場合は1万円、配偶者の場合は5000円)を持っていってもらう(事前に事務局に連絡)。費用は後日事務局に請求する。

④　それ以外の場合は、あまりおそくならない限り事務局から香典を郵送する。

☆　年会費は1000円です。1ページ目の口座に。